

## きつねのお産の二つのお話

### (一) こんぜみさんの話

昔、下氏家のこんぜみさんが若い時のお話です。武生へ用足しに出かけ、周りが薄暗くなりかけた頃にやつと岡山の近くまで帰って来ました。

「もう少しでうち(家)じゃ。はよう(早く)帰らな腹がへつてもたわい。」

と、ひとり言を言いながら歩いていけると、

「おあんさん(おにいさん)、腹がいてえ(痛い)腹がいてえ。」

と叫びながら、この辺では見かけないこぎれいな女の人が、こんぜみさんにすり寄ってきます。

この辺りは、よくきつねが化けて出るといふ話を聞いていたので、こんぜみさんは何となく薄気味悪くなりました。

聞こえないふりをして通り過ぎようとする



また、

「おあんさん、おあんさん、腹がいてえんにや。」

あいてて。」

と、いかにもつらそうにお腹をさすりながら、足もとにまつわりつきます。

「ごんぜみさんは心こころの中で、（ほんとやるか……。

こいつ、きつねが化ばけてるんでねえやるか……。

うら、だまされているんでねえかな……。うん。

やっぱり、だまされてるんにや。（）と思おもいました。

「うざくらしい（うるさい）。うら（私）は、はよ

う、うちへ帰かえらなあかんのやで。だまされたり

せんぞ。」

と言いつと、その女おんなを振り切きつて逃にげだしました。

上かみ氏家うぢやのはずれまで来た時、

「ぶぎや。ぶぎや。」

と、突然とつぜん赤あかんぼの泣なき声こゑが聞きこえてきました。

ごんぜみさんは、ぞおつと背せすじが寒むくなり、う

ちへ飛とんで帰かえりました。

「ほういえば、さっきのめろ（女）は産うみ月つき（お

産さん間ま近か）のようやった。あのねんね（赤あかんぼの

の泣なき声こゑは、さっきの女おんなに化ばけたきつねが産うみ

よつたかなあ。ちよつと、もつけねえ（かわ

いそつな）気きもするけど、うら、だまされてい

るような気がして、恐おそろして逃にげてきてしもた

んにや。」

と、言いひ訳わけをしながら、胸むねをなでおろし、ばつの

悪あくそうな顔かおでみんなに話わして聞きかせました。

## （二） おますさんの話

昔むかしのことです。四し屋や家や（下しも野の田た町ちやうの村むら）のお

ますさんという産さん婆ばさんの家いえの戸とを、

「トン。トン。」

と、たたく音おとがしました。もう日ひが暮くれたのに、

誰だれが来きたのたろうと思おもいながら、戸とを開あけると、

「うら（私）わたくし、氏うぢ家やの岡おか山やまの近ちかくのもんですけど、

ねんねが産うまれそうやで、遅おそうなつてから悪わるい

けど、うち（家）まで来ておっけられんけえの「

急いそいで来きたのでしようか、見みかけない男おとこの人が、

息いきをはずませて立たっています。

人のいいおますさんは、

「ほりや（それは）、おおじっちゃん（たいへん

だ)どれ、行ってあげるぞ。」

と、暗い夜道を、その男の後について、氏家の岡山の近くの家へと急ぎました。

家に近づくと、

「ウーン。ウーン。」

と、つらそうなためき声が聞こえます。

「こりゃ、はようせなあかん。」

と、おますさんは、急いでお産の準備にとりかかり、どうにか無事に、赤んぼを産ませることが出来ました。

「間におおて(あつて)良かったな。」

と、汗だくになったおますさんは、ほつと一息入れました。

「はい。おかげさんで、ありがとう。」

「はい。おかげさんで、ありがとうございますけど、こんなもんで、一腹しておくんな

はい。」

と男が、酒、魚、大根と芋の煮物等を

沢山乗せたおぜんを出して来ました。お酒の好きなおますさんは心の中で、(あれっ、うらが酒好きなこと、なんで知っているんにやる……。知って

いるはずがないんにやがなあ……。ほやけど、なかなかいただけん酒じゃ、ありがたいのう)



とつばやきながら、

「ほんなら、遠りよせんとちようだいしますわの。」

と、はしを手にとりました。

その時、何となく上の方が気になりました。ちよいと上を見上げると、天井は眞暗で、お星さまが一ぱいキラキラと輝いています。

「おやつ。」

と思い、今出されたごちそつを食べようと、下を向くと、何もありません。どこからともなく、風がふわあつとほおをなでます。目をパチパチさせたおますさんは、草むらの中に、一人座っている自分に気がついて、

「あれつ。今のはきつねやつたんか。人をばかにしよつて。うら、だまされたんにやな。」

と、しょんぼり家へ帰って寝てしまいました。

翌朝、目を覚して外へ出てみると、玄関先に、

お頭づきの一匹の鯉と、お金が三文おいてありま

した。おますさんは、昨日の、ごちそつを食べそこなたことも忘れて、

「ああ、きんの（昨日）のきつねがおいていったんにやな。きつねでも、恩は忘れんと、ちゃんとお礼をしるんにやなあ。偉いやつじゃ。人間も見習わなあかんなあ。」

と、感心したというお話です。